

フレーベルと現代教育思想

(フレーベル紀念會に於ける講演)

東京高等師範學校教授 乙 竹 岩 造

今日はフレーベル先生の誕生日で御座います。

先生は一七八二年の四月二十一日に生れ、七十歳の天壽を保つて一八五二年の六月二十一日に亡くなられたのでございますから、此の二十一日といふ日は、二重の意義に於て紀念すべき日でありま

す。此の日に、本會でフレーベル先生の紀念會を開かれますのは洵に意味の深い事と存じます。此の紀念會で私に、何か先生についてお話をするやうにとの事では御座いましたが折角お招きでござ

いますから、喜んで参りました次第で御座います。それで、フレーベル先生の教育意見と現代の教育思想との關係とでもいふやうな點から見て、少しばかり感じました所をお話申上げて見やうと思ひ

ます。

第一に、教育といふものは子弟の心身發達の程度に最よく適合せしめなければならぬといふが、フレーベル先生によつて頗る早く且つ最熱心に唱道せられて居ることでございます。有名な『人類教育論』の中にも、此事が所々に論せられて然かも此の書物は嬰兒、幼兒、男兒、女兒等に分けて、それ／＼適切に論せられて居ります。殊に人間は嬰兒から兒童、兒童から少年、少年から青年、壯年と次第に發達するのであつて、嬰兒の時代を善く經過し無ければ、善き兒童には成長し無いし、良き兒童期を經過し無ければ、良き少年期には達し無いのである。それ故子供は、此世に生れると直ぐ

から正しき取扱ひを受けねばならぬので又各時期

ます。

にそれ〴〵適當な教育が大切なので、唯だ一足飛

第二は、教育の基礎を家庭に求めたこと、否な教

びに子供から大人にしようとするのは無理な事だ

育は家庭と社會との間を結び付けるものであると

あるといふことを諄々と説いてあります。フレー

の考を確立したことでありませう。今日では學校は

ベル氏以前には時期に應じてそれ〴〵適切に教育

子供を家庭から預つて之れに教育を加へて、社會

すると云ふ考がこれ程明確には表はれて居なかつ

に出すものであるといふことは誰れでも言ふこと

たやうに思ひまするので、これが一つ注意すべき

であります。此の考がフレーベル氏に於ては明に

點であります。特に氏の如き嬰兒の中に母を失ひ

立つて居つたのであります。また氏の考では、一

幼児としては繼母にかゝつて十分に注意せられて

方に於ては、子供の自己活動といふことを始終申

は育てられず、又先生自らは、始めの妻にも後妻

して居るのであります。又之れと對立せしめて

にも子供が無かつたといふやうな譯けで、直接子

す。此の點に於ては、フレーベル氏は實にペスタ

供に關係の薄かつた人から、斯様な適切な考の明

ロツチー氏とフイヒテ氏とを兩々相顧みて、その

確に現はれて居ります事は寧ろ不思議と思はれ

中間を進んで居るのでございませう。蓋しペスタ

る程であります。不思議では無く、是れ一方か

ツチは、教育は母の部屋から發するものであると

らは氏の教育の考は殆んど天稟であつたことを見

して、之れが爲に母の本を作つたのであるし、フ

遇苦がい経験からしみ〴〵感せられた結果斯うい

イヒテ氏は、教育は國家社會の共同團體を基礎と

ふ考に到達せられたことをも知るに足るのであり

して行はれなければならぬとしてその國家教

育論を立てたのであります。所がフレーベル氏は實に此の二つの考を省みて恰も其真中を極く穩健に進んで居ります。例へば此の『人類教育論』を見ましても、常に父母を呼びかけて居るので、子を持つて居る兩親を讀者と見たてゝ居るが、之れと同時に社會の共同團體の一員として、立派な人間に仕上げるといふ事が、最大な要件であることを主張して居ります。此の兩方の關係が極めて大事で、その考の具體案として、氏は前には國民教育所を建て、後には幼稚園を創めたのであります。即ち氏の國民教育所や幼稚園は、一方には、實にベスタロッチ氏の家庭基本主義の發揮であると同時に他方には、又フイヒテの國家主義者の實現であります。斯くてベスタロッチ氏の『母の本』も世に實効を表はし、フイヒテ氏の國家教育論も茲に具體的となつたやうに思ひます。

第三は、勤學、創作を重ずる教育主義の發揮であります。近來、歐米孰れの國に於ても勤勞學校

といふものが重要視せられて、創作の喜悅に訴へて子弟を導かなければならぬといふ考が著しく強く成つて來たやうでありますが、此考は、確かにフレーベル先生に因つて早くに唱導せられたのでございます。最もフレーベル氏は勤學といふものは神の意志に叶ふものであるといふ立場に立つて居るのであります。

此の本の序論にも二十一頁の所に「神は絶えず働らいて居るもので、神の考といふものは、仕事、行爲、創作である、然かもそれが永久に續いて居るものである。所が此の働くといふことは非常に深い意義をもつて居るものである」と云つて居る。此は教育を説くのに、常に人間的の方面と、神の方面と、内部的の事と外部的の事、目に見える事と見えぬ事、身體と精神、現在と永久、といふ風にいつでも二つの方面を相對立せしめて説いて居るのであります。さて此の勤勞といふものは實に斯ういふ兩方面を結びつける所の唯一道であ

ると言つて最も之れを重じて居るのであります。

最近の勤勞創作を主とする教育説は、フレーベル氏の様な信心の考から出て居るものでは無いのでありますけれども、然かし兎に角その考の源泉はフレーベル氏に發して居るといふ事は何人も認めなければなりません。

第四は、フレーベル先生の教育上の考は、國家主義、國民主義であつたといふ事でございます。

これは教育事業の全體に亘つて、その動機その徑路を調べるとよく分かることでもあります。一體フレーベル先生は愛國心の強い人で、國家的觀念に満ちた人でございました、それは、氏がルッツォー義勇兵に二度まで自ら進んでなつたことから、又その國民教育所の設計は、出陣中に段々と熟したことから、その他愈その教育所を開いた時に、自ら子供に教へた有様を見ると、或は自分がした兵營生活の譚をして聽かせたり、或は軍歌を節面白

く歌はせたりして居つた所などからしても之れを知るに足るのであります。これはフレーベル氏には終始一貫して居る所であつて、氏が前半生のカイラウ及びブルグドルフ等を中心とした教育事業を見ても、又氏が後半生のフランケンベルク時代及び遊説時代の活動を見ても共に分かることでもあります。然るに、つまらぬ誤解から、氏は社會主義を稱へるもの、やうに思はれ、國民教育所、幼稚園の如きも、當局から之を閉鎖を命せられると云ふやうに災危にあひましたが、これは人違ひであり、思ひ違ひであつた事は轍がて明になつたので御座いまして、氏が國家主義の人であると云ふ事は争ふべからざる所でございます。

第五に、氏は幼兒教育事業の整頓者であつて、殊にその基礎を確實に建設した大恩人であるといふ點でございます。

一體幼兒を集めて之を教育するといふ事は、必ずしもフレーベル氏によつて始めて考へ出された

といふわけではない。既に一七七九年にオーバリン、ルイゼ・シエツプラー夫人の二人によつて獨逸のスタインタールで創設せられ實行せられ、之によつて獨、英、佛、奥に於ても相當に行はれて居たのであります。また氏の幼兒園とは直接何等の關係なくして今日まで發達して居る幼兒教育所もあります。曾て、ロンドンのある幼兒園を參觀いたしました時、その主任婦人が「私の幼兒園は、此度改良してフレーベルの主義によつてやる事にいたしました、お國の方は如何で御座います」と聞かれました。私は事の意外に驚きながら「私の國では、よほど以前からフレーベルの考によつてやつて居ります」と答へました。ロンドンの真中で、こんな事をきくのは一寸豫想外でした。それは兎に角、斯ういふ譯けで、フレーベル氏は幼兒教育事業の創始者ではないのであります。然かし、幼兒教育事業に目的を定め、全教育系統中に於けるその位置を明かにし、之を研究して之れに基礎

を與へたといふことに至つては實にフレーベル先生の力であります。即ち保育事業の創始者ではないが、その動かざる基礎となつた建設者であるといふの意味に於て、氏の功蹟は實に不朽で御座います。その上幼稚園といふ名は、氏が始めて考へ出した所で御承知の通り、ブランケンベルグの山路を越える時、豫ねて幼兒保育所に何といふ名をつけたらよからうと頻りに考へて居たのであるが丁度此の時山の頂上に達した時ハタと手をうつて「幼稚園」にしようと呼んで雀躍したといふ。あれが抑も始めであります。そしてその園と言つたのは二つの意義を含んで居るので一つは、小さい子供の居る所だから園といふのがよからうといふのと、二つには子供を園に育つ樹々に譬へたのと此の二つの意義と合せたのだと申すことでございませう。そしてその名は、今なほ、世界各国に原語のみ、用ゐられて居るのであります。

第六、氏は遊戯の教育的價値の發揮者である事

でございませう。此の『人類教育論』の中にも毎度論せられて居りますので、例へば第一章概論の所にも「遊戯は、子供の自然の仕事であつて、且つその最好む所である。従つて子供の教養は遊戯によるのが一番よい」と申して居りますし、又第二章幼児の所にも、「遊戯といふものは、子供の内部が、内部それ自身の必要から、自由に外に溢るゝ働きて、此の時期即ち幼児の頃に於ける純精神的の産物であると同時に、一生涯の生活に對して之れが手本たると同時に、うつしたのである。そして喜悅、自由、満足、安心を興ふるもので外界世界と平和を保持するものである。遊戯に於て眞摯に、自立的に、安靜に、引續き、行つて居る子供は、他日眞摯に、自立的に、安靜に、引續きよく働く所の成人に成る」と申して居ります。一體幼児の教育には遊戯が最もよいといふことは、昔から教育家の考へた所で又實際行はれた所でありまして、希臘の教師も羅馬の保母もその重なる仕事

としたのであります。けれどもそれは經驗的に、子供の遊戯は大切とせられて居るのですが、フレイベル氏に至つて、その眞の意義が發揮せられ、その陶冶的價值が明かにせられたのでございませう。これは大なる卓見と言はなければなりません。一體遊戯の本質に就ては色々の考がございませうので、その重なるものを申しますと、シラー、スペンサーの諸氏は、遊戯を以て子供の蓄積せられたる勢力の發散と解して居りますし、又、シヤラー、ラツアールスの諸氏は、遊戯を以て慰藉の行爲であると説いて居ります。兩方共一部の眞理を含んでは居るが、なほ不十分な説であります。グロース氏に至つては、遊戯を以て、天稟素質の練習若くは發展であると説いたのでありまして、これにはアーメント氏なども同意を表して居るので先づ尤もの見解であると思はれるのでございませうが、之れに近い考が已にフレイベル氏によつて已に述べられて居るのであります。遊戯の教育

的價値は近時ジャンパウル、コロツツア、グロースなど色々の人々の研究に因つて、だん／＼と發揮せられて參つたのですが、それはフレイベル氏に負ふ所も實に少く無いのでは御座います。時に注意すべき一はフレイベル氏が玩具の最大切なるものは仲間の子供であるとして居る點であります。

それは、極めて意味の深い着眼であると私は思ひます。それからその二は、所謂玩具は、複雑なもの必ずしも子供に重んぜらるゝのでは無い、子供にはそこいらに散らばつて居る竹の切れども、棒のはしでもよいと云ふ見地から更らに考は恩物に進んだので御座います。

第七、教育の方法について活動を重んじて居る點であります。前にも申しました通り、フレイベル氏は子供天稟の自己活動を重んじ、之れを適當に發達せしむるといふ事が實に教育の要旨であるとしたのでございますから、唯だ教へ込むといふ様な事を教養の本旨とはし無かつたので、寧ろ自

己活動を十分に働かせ、よく之れを育て上げるといふを以て根本としたのであります。そこで氏は此の『人類教育論』の中にも多くの所に然かも同じ言葉を用ゐて繰り返へし／＼之を申して居ります即ちそれは、子供を助け後から付いて行くやうにして、育つべきであつて、こちらから型を定めて強いてそれにはめやうとしては不可ぬといふことでこれは毎度繰り返へして述べられて居ります。之れを以て見ても、フレイベル氏の教養の主義は子供の活動を重んずるのにあつて、猶ほ且つその方は十分に之れを伸ばしめるやうに仕向けるにあつたことは、明かでございます。然るに年月を経るの久しき、後に成つては動もすると、形式に拘泥して、フレイベル氏の本統の考が忘れられ、所によつては大分に幼稚園の工合が變つて來た様であります。是に於て乎近頃は彼のモンテソリー女史の幼児教育法などが刷新運動のやうのやうに考へられるのでございませう。けれどもよく／＼考

へて見ると或る意味から申せば、フレベール氏の教育方法の眞義の復活と見てもよいかと思はれます。尤もモンテッソリー女史の考はフレベール氏の外ベスタロッチャー、イタール、セガン諸氏の意見を酌んで出来たものではありますが、然かし子供の活動力を十分に伸ばさせやうとする所はフレベール氏の考と頗る一致して居るのであります。

第八は、子供の衣食住の全般に渡つて、ひろく考が及んで居る點であります。人は幼稚園といへばやゝもすれば唯だ子供を遊ばす所と思つたり或は子供に物を教へる所と思つたりする傾が随分ございしますが、フレベール先生は早く己に達観して、氏の考は廣く幼兒教養の全般に渡つて居ることを認められるのであります。實に氏は、幼兒の食物、衣服、住居について周到なる注意を拂うて居ります。此の點に就てはロツク氏などの教育法とその着眼が似て居るので頗る注意すべき所でありま。今日では段々進んで來て殊に思慮ある兒

童研究者は、兒童の食物、衣服、睡眠、住居など全般へ渡つても色々研究せられて居りますが、かう云ふ種類の研究に向つて、夙にヒントを與へて居る所のフレベール氏の着眼は敬意を拂ふべきであると思ひます。

第九、職業的堪能や、藝術的陶冶の問題は、近頃大分喧ましく言はれて參りましたが、さういふ考がフレベール氏の教育思想には、明かにあつたといふ點でござい。現にフレベール氏の言つて居る所を、よく調べて見ますと、子供には子供が日常見聞する卑近自然の所からして、家事的の方面や職業的の事などを知らしめて、世の中の生活を理解せしむることを勤めて居るのが分かるのでござい。獨逸の國民幼稚園などでは今でもその預かつて居る所の子供の將來を考へて、遊戯でも何でもさういふ方面の注意を相當に加へて居るやうであります。これはその幼稚園の内容即ち子供の身分やなどによつて、違ふべきでありますか

ら一概には決して申されませんが、それ／＼適切なる注意は必要なことと存じます。

第十、最後にフレーベル氏の教育意見の根本原理について少し申上げて見たいと存じます。前にも申した通り、フレーベル氏は始終二つのものを對立せしめて説いて居るので、例へば人間的の方面を？神的の方面、内部的のものと外部的のものと、自然的のものと、精神的のものと云ふやうに始終論を立て、居ります。そして自然的な外部的な衝動的な所を、教育陶冶に因つて、よくしやうとするのが、フレーベル氏の考と見ることが出来るのであります。され今日段々唱へられて居る所のベルグソン氏やオイケン氏の精神生活を重ずる所

の思想に於ては衝動的な生活と精神生活を對立せしめて我々がよく精神的生活を以て衝動生活を統整することを努めるのが實に我々人格の修養であるとするのでありますから、一方は哲學に其根底をおきフレーベル氏のは宗教に其源を發して居る點に於て元より相違はあるが、その説き方に幾か似たやうな所もあるやうに思はれます。

今日この紀念すべき日に當りまして、フレーベル先生の教育思想に就いて所感の一端を申述べて聊か先生を偲びたいと思ひます。少しでも皆さんの御參考になるやうな事が御座いますなら、望外の事と爲します。御清聴を深謝致します。

木かくれて名譽の家の幟かな
家ふりて幟見せたる翠微かな

蕪村
同